



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.15 Nov.2010

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は、沖縄県の伊江島。サンゴ礁の保全グループ 108 名を率いるのは、34 才の若き組合長。作家の吉村喜彦さんが、ゆったりとした島と、そこで暮らし活躍する若きリーダーの横顔をご紹介します。



なぎさシリーズ No.11

「ちばりよー。いーしま組合長」

吉村喜彦

◆ 伊江島へ ◆

那覇から高速道路で名護に出て東シナ海に突き出た半島を回り込み、本部（もとぶ）港へ。フェリーに乗って30分。伊江島（いえじま）に着く。船の待ち時間などを入れると、那覇空港から約4時間の距離。

フェリーには修学旅行の高校生でいっぱいだった。伊江島は手頃な距離にある離島なので、那覇からもアクセスしやすく、近年、修学旅行の生徒が全国から訪れている。普通の修学旅行とちょっと違うのは、中

高生たちが民泊（みんぱく）といって、民家に宿泊して家業体験をすることだ。家業というのは泊まらせてもらうお家の仕事のこと。農家ならサトウキビや菊、ゴーヤー、冬瓜、マンゴー、島ラッキョウ、ピーナツ栽培などを手伝い、漁師のお家なら、オキナワスギ、ヤイトハタの養殖体験、畜産のお家なら伊江島牛の飼育や山羊の世話などをする。

暮らしに直接触れることで、少しでも島を理解し、ほんとうの意味での見聞を広め

	都道府県:	沖縄県
	地域協議会:	沖縄県環境・生態系保全対策地域協議会
	活動組織名:	伊江環境生態系保全活動組織
	協定先:	伊江村
	構成員数:	108名
	対象資源:	サンゴ礁
活動内容:		食害生物の除去、サンゴの種苗生産、サンゴの移植、保護区域の設定、浮遊・堆積物の除去

てもらおうというコンセプトだ。伊江村では約160軒に民泊、年間約3万人の修学旅行生を受け入れている。

島に向かうフェリーのなかで高校生が海を見ながら浮き浮きしている様子は微笑ましい。島人のあたたかいホスピタリティーが民泊をどんどん増やしているのが想像される。

◆ もったいないさー ◆

伊江島は周囲22キロ。人口5000人足らず。第2次大戦の激戦地であり、いまも島の西部は米軍の飛行場と訓練場（島全体の約35%）になっていて、その沿岸での操業はできない。

この島に、沖縄県で最年少の漁協組合長が昨年誕生した。八前隆一（はちまえりゅういち）さん（34歳）である。長野県から移住した人だと聞いた。かれが、なぜ伊江島に住むことになり、漁師になったのか。そして今どのような仕事に取り組んでいるのかを聞いてみたかった。



八前さん（左）と筆者

伊江島漁協は港の近く、泊まった民宿のすぐ目の前にあり、一階の一部は漁協女性部の運営する「磯」という直売店になって

いた。伊江の海人（うみんちゅ）の獲ってきた鮮魚がたくさん並んでいる——ミーバイ2尾1250円、アカジンのあら880円、イラブチャーの刺身500円。マグロの南蛮漬け・小100円・大200円。それぞれ1パックでこの値段！



「伊江島おっかー自慢のイカ墨じゅーしー（炊き込みご飯）の素」というのも売っていた。2008年に漁協女性部が中心となって開発した商品で1パック358円。売り場の女性に訊くと、商品価値がないとされていたゲソをどうにかしようと試行錯誤して生まれたもので、年間10万食も売れているという。

豚は鳴き声以外ぜんぶ食べるというのが沖縄の食文化だった。かつてはお盆や年末に豚一頭をつぶし、塩漬けにして保存したり、油（ラード）をとったり…と一頭をまったく無駄にせず利用してきた。そこには、他の生命をいただくことで自らの生命があるという循環・繋がりがある。いただく限りは余す所なくいただく——それは物質的に貧しかった故の知恵でもあった（それは世界中で同様だった）。

そうした文化の伝統が女性部の発想に引き継がれ、この「イカ墨じゅーしーの素」

が生まれたのだろう。モノがなかったり、「もったいない」という思いから、知恵を使った新しい食が生まれるのだ。

◆ 組合長八前(はちまえ)さん! ◆

組合長・八前さんは真っ黒に日焼けし背筋の真っ直ぐ伸びた、いかにもスポーツマンといった好青年。20歳のときに伊江島に移住したという。

生まれは名古屋だが、すぐ沖縄・金武(きん)に転居。小学校入学まで金武に住んだが、長野県南木曽(なぎそ)に移り、高校卒業まで在住。やがて東京の専門学校に進み、ダイビングショップで働いた。そのダイビングの仕事で、伊江島に来ることになったのが14年前のこと。

ちなみに母親は伊江島生まれである。



「初めてのダイビングは北谷(ちやたん)。沖縄に遊びに来て、おばの家に泊まって。長野にいる頃、海で遊んだ記憶はそれだけです。なんせ長野は川しかない(笑)」

海は好きだったんですか?

「うーん……好きってことはなかったなあ。なぜかダイビングやったって感じ。親戚に

も海人は誰もいないし」

本格的にダイビングを始めたのは?

「専門学校に入ってから。子どものためのスポーツ・インストラクターの学校だったんで教育の一環としてダイビングの授業があったんですよ」



どうしてダイビングにはまったの?

「お姉ちゃんがワイワイいるからじゃないですかね」ニコッと笑った。

ダイビングやってて、モテました?

「いえ。全く。伊江島ですからねえ。若者来ないです(笑)。東京にいるときはショップの丁稚ですから、肉体労働の極致です」

伊江島では自らショップを経営。ダイビングの仕事を辞めて、どうして海人になったんですか?

「えっ? ダイビング、辞めてないですよ」
辞めてない……?

「ダイビングやりつつ、漁師もやってます」

兼業海人なんだ。でも、どうして海人に?

「メシ食うためですよ。ダイビング自体、下火ですからね。まあ、ここでも夏はある程度お客さん来るけど、冬は来ないんで。要するにダイビングがないときに何をする

か、ということです。いま漁師の仕事を始めて12年くらいです……

最初の漁師の仕事？ぼくのショップの隣の民宿の親父さんがマグロ船持っていたんです。その乗組員が怪我で漁に出られなくなって、『お前、ヒマそうだな』ってことでその船に乗ることになったんですよ。乗組員の漁師が『ちょっと那覇で遊んでいこう』って迎えに来てくれて、『何でも好きなもん食べや』て、その晩したたか飲み食いして……

『じゃ、行くか』て船に行ったら、そのまま出港。あれっ！て感じ……

船には長靴も合羽もちゃんと買ってありましたよ」



19トンのマグロ船で2週間。大東島と沖縄島の間、の漁場に10回縄を入れた。延縄の長さは100キロ余り。ちょうど沖縄島の北から南の端くらいある。朝5時から10時まで投縄し、2時間ほど昼寝。12時から24時頃まで縄を揚げた。

「縄が切れた日には朝4時まで揚げてました。で、起きるのが5時ですから……。ほとんどタコ部屋状態。でも、面白かったです」

那覇に帰り、もらった給料のほとんどは飲み屋に消えていった。

「結局マグロ船で2航海やったら、夏になっていて、今度はダイビングの仕事。それを10月までやって再び漁師。そしてまた2人乗りの船でソデイカ漁。ゴールデンウィークになると再びダイビング。そんなことの繰り返しです」



◆ この海こそ島の幸ですから ◆

八前さんは、その他にも、刺し網、追い込み、電灯潜り—といろんな漁法で仕事をしてきたが、「組合長になってからはデスクワークばかりで、海に出るのは一人で釣りに行くときくらい」とちょっと寂しそうに笑った。

伊江島漁協は45歳以上の漁師が3分の2を占める。八前さんよりも若い漁師は5名。

「ですから、ぼくが使えるのは5名だけ」そう言って白い歯を見せる。

では、なぜ半分ナイチャーの八前さんが、組合長に選ばれたのだろうか？

「うーん。きっと、使いやすいからじゃないすかね」あくまで客観的に答えた。「で

も、なった以上は頑張ってるよ」

組合長2年目の今年（2010年）。伊江漁協は島の港で水揚げされたソデイカのヒレを使った餃子「伊江島発イカ墨ぎょうざ 墨ちゃん」を開発し、伊江村内の学校給食でもオン・メニュー。地産地消にも取り組みつつ、県外販売ルートも開拓している。ネーミングは村内の中学生。民泊に続いて、島が一体となって売り出す商品だ。

また漁協観光部会は「いーしま海人遊学」という海人の体験学習・海遊びプログラムをスタート。追い込み漁体験やダイビング、ビーチスノーケルなどのマリンプレイ体験ができる。

こうした新しい活動が実施されていくのも八前さんという若いエネルギーの賜物だろう。

その新しい活動の一環としてやっているのが09年から始まったサンゴ礁保全活動だ。



白化後、回復のみられないサンゴ礁域

伊江島は島の南と東、西側の海域に広大なイノー（ラグーン）が発達しているが、北側は断崖絶壁の海岸が続き、サンゴ礁は発達していない。イノーのサンゴは1998年の大規模白化によってほとんど死滅。

現在、保全活動で取り組んでいるのは島の東側のサンゴ礁のリーフエッジ（縁）近辺のモニタリング（現状把握）である。

秋の一日、そのモニタリングに同行させてもらった。参加人員は6名。調査をしたのは、島の北東部オホバというダイビング・スポットにもなっているサンゴ礁域とイノー2箇所。かつて白化したオホバのリーフエッジには小さなサンゴが出てきていた。



白化後、回復が進むサンゴ礁域

ここではグルクン、イラブチャー、アーラミーバイなどの刺し網や電灯潜りが行われているそうだ。

「オホバは去年よりは増えてるね。数年前に比べると魚影も濃くなっている。けど、まだまだ」

八前さんが冷静に言ったが、伊江ビーチ前のイノーに来ると、サンゴはまるでなかった。

海人のひとりが「このあたりは昔はホンダワラがいっぱいあったんだけど、藻場は全然ないさ。魚も少なくなってるよ」と言い、「まだしも幸いなのはオニヒトデが出てきていないことかな」と八前さんが言う。「少なくともサンゴがきれいになってから、

魚が徐々に戻ってきているのは確かなんです。だから、再びサンゴを壊さないようにしてあげないと。この島は海人とダイビング関係者が対立していないんで、一緒にサンゴ礁回復に取り組めるのもいいことですよね」

伊江島の海人は漁船漁業が多いという。

八前さんは言う。

「遠くの海に行って仕事をしている海人も、もちろん先輩方も伊江島のサンゴ礁の状況はわかっています。いまはパヤオやソデイカの仕事をし、島から離れた海で仕事をしている若い人も、やがてこの島の周りで仕事をするようになるでしょう。そのときに島のほんの目と鼻の先にあるこの海で魚が釣れるような環境があるかどうかすごく大事だと思うんです。この海こそ島の幸ですから」



まさに「青い島」である。

自分の足元にこそ幸せがある——島の外からやってきた八前さんだからこそ、そのことをより客観的に感じるができるのではないか。島の外と内とを結ぶ、まさに島人の「イノー」として仕事をしているのだ。これからも八前さんはきっと新しい風

を吹かせ続け、伊江島はますます「いーしま」になっていくだろう。そのことを祈りつつ、モニタリングの船を下りた。



写真：中野義勝氏(琉球大学)、
田中・関根(JF 全漁連)

～ 著者プロフィール ～

よしむら のぶひこ

吉村 喜彦 氏



作家。

1954 年大阪生まれ。

京都大学教育学部卒。

サントリー宣伝部勤務を経て作家に。

著書に「オキナワ海人日和」(カラカラ)、「ピアボーイ」(新潮社)、「漁師になろうよ」(リキュール&スピリッツ通の本)(いずれも小学館)、「食べる、飲む、聞く 沖縄美味の島」(光文社新書)、「こぼん」(新潮社)など。

伊江環境生態系保全活動組織について

伊江島は、周囲約22.4km。北部沿岸を除く全域が広大なサンゴ礁による浅い海域（イノー）によって囲まれています。このイノー内のサンゴは、1998年に発生した大規模白化によってその多くが死滅しました。サンゴ礁の衰退による沿岸漁業への影響は大きく、2009年、伊江島の漁業者が中心となって「伊江環境生態系保全活動組織」を立ち上げ、サンゴ礁の回復のための活動が始まりました。

「伊江環境生態系保全活動組織」の主な保全活動は、食害生物（オニヒトデ）の除去、浮遊・堆積物の除去などです。現在、サンゴの回復が認められる一部の海域では、保護区域の設定を計画しており、また、サンゴの移植なども検討しています。

今回の取材では、サポート専門家（里海サポーター）の中野義勝さん（琉球大学）に同行いただき、サンゴ礁のモニタリングや保全活動について様々なアドバイスをいただきました。以下、サンゴ礁のモニタリングについてのアドバイスの一例を紹介します。

今回みなさんと一緒に観察した各地点（写真：A、B、C地点）は、サンゴの生育状況のモニタリングに最適な場所です。今後、この3地点を継続して観測することで、当事業で設定した対象資源の状況を把握できると思います。

モニタリングの方法としては、各地点に測線（10m）を設置し、これを反復して観測することを推奨します。設置した測線の左右50cmが写るように連続写真（1m×1mを10枚）を撮影すれば、サンゴの種類や被度が概観できるので、折々のサンゴ礁の状況が時系列的に把握できます。観測は定期的に行う必要はありませんが、反復することが大切です。

撮影時には、オニヒトデの目撃数やその大きさ、サンゴ食マキガイ類（シロレイシガイダマシ）の出現状況、周囲に見られるスズメダイなどの魚類の種類や数などの所見を併せて記録するようにします。

データの解析や考察は、私どもサポート専門家に依頼しても良いでしょう。相互の協力のもとに効果的な管理計画を作成することが重要です。



モニタリングA地点

伊江島南東岸の地点。波当たりが強くなく、かつ潮通しの良い環境に生息するサンゴ群集の痕跡がみられる。現在、サンゴの生育状況は悪く、10m測線上の被度は1m²あたり数%にも達していない。



モニタリングB地点

伊江島東岸の地点。冬季の季節風の影響を受け、サンゴ礁礁原は広く、深い礁池が形成されている。設定した10mの測線を越えてユビエダハマサンゴの単一群落が発達し、測線上の被度は1m²あたり100%となっている。



モニタリングC地点

伊江島北東岸の地点。冬季の季節風の強い影響を受ける礁斜面上部のサンゴ礁地形。潮通しの良い場所を好むミドリイシ類・ハナヤサイサンゴ類が優占し、10mの測線周辺では、被度が1m²あたり60～80%となっている。

写真はいずれも中野さん撮影

「藻場・干潟・浅場・サンゴ礁・ヨシ帯の保全活動」事例発表会の開催 “なぎさの守人” シンポジウム 2011

“なぎさ”（藻場・干潟・浅場・サンゴ礁・ヨシ帯など）の保全に取り組み、その働きを復活させようとがんばる漁師・市民・行政・・・そんな“なぎさの守人”たちの活動を紹介するシンポジウムを開催します。

■ **ブロック大会**：保全活動にたずさわる活動組織を全国4ブロックで紹介！

01/20
青森会場

青森県水産ビル

01/27
広島会場

広島 YMCA ホール

02/02
静岡会場

クーポール会館

02/08
長崎会場

長崎県
商工会議所



■ **中央大会**：4つのブロック大会で紹介された代表的な保全活動の事例を紹介！

02/28
東京会場

グランド・アーク
半蔵門

環境・生態系保全対策に係わる地域協議会及び活動組織の皆さまへ活動の紹介に関して、皆さまのご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。また、ブロック大会は、特に皆さまの情報交換の場にしたいと思っていますので、多数のご参加をお待ちしています。

詳しくは：JF 全漁連漁政部 環境生態系保全グループ
Tel：03(3294)9617

「藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ原保全」情報交換サイト 「ひとつみ.jp」のご紹介

2009年10月より藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ原保全情報交換サイト「ひとつみ.jp」が開設されています。さまざまなコンテンツが用意されていますので、是非、ご覧下さい！！

藻場、干潟？私の暮らしと関係あるの？

海のゆりかご？観てみたいなあ・・・

どんな取り組みがあるのだろう？

イベントや講習会・・・役立つ情報ないかなあ

他の地域の人と情報交換したいなあ・・・



「ひとつみ.jp」： <http://hitoumi.jp>

